

第5回 東アジア島嶼海洋文化フォーラム

海洋文化の多様性

日程 2017年12月3日(日)～12月6日(水)

会場 愛媛県松山市いよてつ会館

参加者 57名(韓国8名、中国16名、台湾7名、日本11名、関係者15名)

[所員] 田上 繁 内田青蔵 小熊 誠 昆 政明 佐野賢治 泉水英計 前田禎彦

[客員研究員] 萬井良大 [国際常民文化研究機構運営委員(学外)] 渡邊欣雄

[職員] 村川浩幸 窪田涼子 越智信也 中村奈緒子

[歴史民俗資料学研究科博士後期課程] 李徳雨 姜婧

第5回東アジア島嶼海洋文化フォーラムを主宰して

小熊 誠

東アジア島嶼海洋文化フォーラムは、韓国木浦大学校が中心となって、鹿児島大学、上海海洋大学、中国海洋大学、浙江海洋大学、広東海洋大学、台湾海洋大学などの海洋文化に関わる各研究機関が参加して2013年に鹿児島大学で第1回フォーラムが開始された。神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研という)／国際常民文化研究機構(以下、国際機構という)は学術交流の協定を結びつつ、第2回フォーラムは上海海洋大学そして第3回フォーラムは木浦大学校、第4回フォー



写真1 フォーラム1日目／集合写真



写真2 フォーラム2日目／総合討論

ラムは台湾海洋大学と継続してフォーラムに参加してきた。その後を受けて、2017年の第5回フォーラムは常民研と国際機構で主催することが決定した。

国際機構の本体である常民研は、戦前の発足当初から90年以上も海洋文化研究を遂行しており、戦後の1949年から1955年にかけて水産庁から委託されて全国の漁村から収集した約30万枚にもわたる「漁業制度資料」(筆写稿本)が所蔵されている。全国各地の漁村において、漁業史料や漁業民俗を研究しており、常民研は日本において海洋文化研究を継続してきた歴史ある研究所ということができる。

その常民研の国内のおよび国際的共同研究を推進する国際機構が中心となって、第5回東アジア島嶼海洋文化フォーラムを主催することになり、検討の結果、開催場所を愛媛県松山市に決定した。常民研は、20年以上にわたって、松山市の瀬戸内海側にある二神島を研究しており、日本の瀬戸内海における海洋文化を海外の研究者に知ってもらうことも重要だということで、松山市でフォーラムを開催することに決まった。また、松山市は神奈川大学創設者米田吉盛先生の出身地である喜多郡内子町に近いということもあり、神奈川大学から支援をいただき、また愛媛県と松山観光コンベンション協会からも多大な援助を賜った。

さて、第5回東アジア島嶼海洋文化フォーラムは、2017年12月3日から12月6日にわたって開催された。会場は、松山市の中心地一番町通りに面した「いよてつ会館」で行なわれ、参加者は韓国8名、中国16名、台湾7名、日本11名、関係者15名の57名であった。そのうち、研究報告者は39名であり、2日間にわたって研究発表が行われた。

研究テーマによって、A班からI班まで9グループに分かれた。その概要は、以下の通り。

- A：海洋と歴史Ⅰ（司会者：泉水英計 神奈川大学）
- B：海洋と歴史Ⅱ（司会者：姜鳳龍・金在恩 木浦大学校）
- C：海洋資源と文化（司会者：黄麗生 台湾海洋大学）



写真3 3日目／観潮船の様子

D：海洋文学と文化（司会者：曲金良 中国海洋大学）

E：海洋民俗（司会者：小熊誠 神奈川大学）

F：海洋文化と観光（司会者：修斌 中国海洋大学）

G：海洋考古学と船上生活者（司会者：王元林 暨南大学）

H：海洋交流と水産資源（司会者：洪善基 木浦大学校）

I：海洋と文化（司会者：鞏建華・黄艶 広東海洋大学）

9グループに分かれたが、一会場に全員が集合して研究発表が行われた。それぞれの班で4・5名が発表し、これら39名分の発表には、現地語と英語で発表要旨が事前に提出され、合計506頁にわたる要旨集が印刷されている。各人の発表時間は、たった15分間だったが、班ごとに活発な質疑応答が行なわれ、2日間にわたるフォーラムは盛況のうちに終了することができた。

私は、39の発表をすべて拝聴した。海洋文化という設定はあるが、その内容は文学から考古、歴史、民俗と幅広いものだった。その中で、今回の特徴としては、水産資源に関する発表が、Hという一つのグループとして発表できたことが挙げられる。鹿児島大学の河合溪氏による「奄美群島における貝類の生物多様性と人間の利用」や木浦大学校の宋奇泰氏による「水産養殖の時代—その現状と展望—」、そして台湾海洋大学の詹滿色氏による「台湾における再生可能エコ印地産シーフードに対する消費者需要の測定」などは、文理融合の立場からも、この海洋文化フォーラムの幅を広げる効果をもたらしたと思う。

また、Gグループの考古学の発表も目新しいものだった。韓国国立海洋文化財研究所の曹珍旭氏による「新安船の交易モデルとさらなる考古学的研究」と愛媛大学の柴田昌児氏による「古代木造船と瀬戸内海における人間活動」は、古代における木造船を対象として、東アジアの人の動きを知ることができ、大変興味深い発表であった。とくに、柴田氏の発表は、開催地である瀬戸内と東アジアの世界の関連がわかる発表でもあり、参加者全員にも関連する内容だったと思われる。



写真4 3日目／エクスカージョン（於来島山頂）

フォーラムのプログラムは、発表グループごとに中、台、韓、日の発表者がそれぞれ参加し、そのグループ内での発表内容について各地域からの質問が提出されるように工夫した。そのため、発表は英語が原則だったが、質疑応答には中国語⇔日本語、韓国語⇔日本語の通訳を置き、3か国の参加者が通訳を利用して現地語での質疑応答ができるようにした。時間はかかるが、3か国の参加者が一つの質疑応答に対してそれぞれ理解でき、それを通して相互間の理解が深まったと思われる。

次年度は、広東海洋大学でベトナムの研究者も交えてフォーラムが予定されているので、言語の相互理解に工夫が必要だと思われる。

3日目は、エクスカージョンとして瀬戸内しまなみ海道を見学した。来島海峡では観潮船に乗って渦潮を間近に見て、参加者全員が感動していた。その後、波止浜造船所を船から見学し、来島に上陸して水軍村上氏の城跡を歩いた。当時の水軍は、ただ単に海賊として船から利益を強奪していたのではなく、悪いものの往来を監視し、海運の円滑な推進を行っていたことがわかった。その後、村上水軍博物館を参観して、最後は今治タオル本店で伊予木綿による世界有数のタオルを見て、購入した。エクスカージョンでは、瀬戸内海洋文化を探索することができた。

本フォーラムでは、506頁にもわたる報告論文集に基づく充実した研究報告と熱心な研究交流が行われた。国際機構委員長であった田上繁氏および実行委員長であった小熊誠を中心に、常民研、国際機構の教員とスタッフ総動員によって、東アジアにおける国際的な海洋文化研究が成功裏に終了することができた。さらに、神奈川大学が海の研究を目指すことに通じた、研究フォーラムであったと言えることができる。このフォーラムには、愛媛県観光物産協会と松山観光コンベンション協会の協力を得たことを記し、深く感謝します。

次年度は、中国の広州海洋大学が開催地と決まった。今後も、国際常民文化研究機構として海洋文化フォーラムに継続して参加をしていくとともに、フォーラムを通して知り合った海外の研究者と個別に共同研究を展開していくことも検討していく必要があると考えられる。